

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：32406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02726

研究課題名(和文) 英語の運用力向上につながる総合学習英文法の開発に関する研究

研究課題名(英文) Research on creating a system of English pedagogical grammar that contributes to the development of practical English skills

研究代表者

岡田 圭子 (Okada, Keiko)

獨協大学・経済学部・教授

研究者番号：90316274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語を母語とする英語学習者にとって何が困難なのか、また、母語からどのような影響があるのかを、現代理論言語学研究的知見を反映した文法解説を通して検討し、学習者のメタ言語知識の育成を進めることのできる効果的な学習文法の記述を試みた。例として、英語の項構造、関係代名詞、受動態などについて、日本人学習者の陥りやすい誤りを分析して、これらの統語的な特性について明らかにした。これらの基礎研究によって得られた知見に基づき、日本語母語話者の第二言語としての英語習得に関する調査のデザインを行った。そして、言語への気づきを高める方法を提案した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we tried to find ways to develop a system of English pedagogical grammar that can nurture metalinguistic knowledge of learners. We conducted a study to identify what is difficult for Japanese learners of English and how their first language affects their learning, based on theoretical linguistics. We analyzed errors made by Japanese learners in their acquisition of English structure such as argument structures, relative pronouns, and passive forms and identified their syntactic features. Based on the knowledge acquired through these basic research results, we designed research methods for the acquisition of English by Japanese learners. Instructions that can raise the learner's awareness to language were proposed.

研究分野：英語教育

キーワード：学習英文法 英語教育 第二言語習得

1. 研究開始当初の背景

(1) 大学入学者の学力低下が指摘される中、確かな文法知識に基づいた英語コミュニケーション力を涵養する、新しい英語学習文法の開発を目指した。

(2) 第二言語習得において、メタ言語知識、すなわち、対象言語の内在的かつ暗示的な言語知識を明示化した知識が重要な役割を果たすことについては、Ellis (2009) らが論じている。また、英語教育においてメタ言語知識を育成することの重要性については大津(2012) らが主張している。本研究は、ヒトに与えられた言語知識は生得的かつ普遍的であるという、現代理論言語学から得られた知見に基づいている。これを手掛かりとして、学習文法において記述されるべきメタ言語知識にも言語普遍的な側面と個別言語に固有な側面とがあり、これを考慮した明示的で体系的な文法教育を行えば学習者の理解が容易になると考えた (大津 2012 他)。この場合、日本語を母語とする学習者にとって何が難しいのかを見極めることが重要であり、第二言語習得研究 (White 2003 他) を参考にすることが重要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、上記で述べた背景を踏まえ、以下の2点を目的とした。すなわち、第1点として、学習者の学習者のメタ言語知識を涵養できる英語学習文法を開発すること、第2点として、明示的に提示したメタ言語知識を定着させるために効果的な課題を開発することである。

3. 研究の方法

研究の方法としては、以下の2点を中心とした。すなわち、第1点として、学習文法における文法項目の選定及び文法解説のあり方を検討し、第2点として、第1点で選定した学習英文法の項目と関連した課題の作成である。

研究グループは全員で協力して進めたが、項目選定を行う「第二言語習得研究部門」、現代理論言語学の知見を活かして項目の記述を検討する「学習英文法研究部門」、文法項目に関連付けたタスクベースの課題を作成する「タスクベース課題作成部門」に大きく分かれての活動も行った。項目の選定においては、言語学の知見を活かして日本人の英語学習者の誤用が多いものを選定し、さらに、大学生を対象とした質問紙調査を実施して誤用例を確認した。

4. 研究成果

研究成果は主に以下の3点である。それぞれ、日本語を母語とする英語学習者が難しいと感じる (間違いの多い) 項目について、行ったものである。

(1) 動詞の項構造に関わるもの。

英語力がかなり高いと思われる大学生でも、

本研究での質問紙調査で以下のような間違いを犯した。

前置詞の脱落

例: I want to give it ___ my father.

目的語の脱落

例: A: Why don't you buy a computer?

B: Of course, I want to buy ____, but I have no money.

上記のような誤用の原因として英語動詞の項構造に関する言語知識の不足と日英動詞の項の具現に関する言語知識の不足とが考えられる。そのため、これらを明示的に提示し、定着を図るためのタスクを提案した。具体的には、語彙特性に気づくための文法性判断タスクや条件付きライティングタスク、日本語と英語の動詞の項の具現の違いを意識させるタスク、自由ライティングタスクや訂正フィードバックなどである。



図1 産出 (ライティング) タスクの例

上記図1を用いたタスクは、左図と右図を順に英語で描写させるものである。

(2) 関係代名詞に関わるもの

日本語を母語とする英語学習者は、関係代名詞の使用を避ける傾向があることが知られている。また、本研究での質問紙調査では、関係代名詞の使用において次のような誤用をした。

例: Ingredients which dangerous drugs are included are unknown.

例: ...if you see shooting star which you repeat what you want three times, you are lucky.

これは、日英語の関係代名詞構造が大きく異なることから来るものと考えられる。それは、英語においてはギャップが必要であるのに対し、日本語ではギャップが不要であることである。日本語で「魚が焦げる匂い」は文法的であるが、英語では、the smell which fish is being burnt は非文である。

このことから、本研究では、この日英語の関係代名詞構文について以下の様な明示的な享受法を提案した。

・文法記述の提示、及び、気づきを高める (Consciousness Raising) タスク。

例: 日英語の関係代名詞構文を見てディスカッションする→文法性判断タスク→日英語比較→絵を見てディスカッションするタ

スク。



図2 ディスカッションタスクの例

上記図2を用いたタスクは、

A: My daughter Mary works for a company in Kagoshima.

B: What kind of company?

A: She works for a company which makes furniture.

B: Oh, I see.

という会話を提示し、なぜBさんがWhat kind of company? と聞かなければならなかったか、また、Aさんがなぜwhichを用いた文を使って答えたのか、考えさせ、関係代名詞の機能に気づかせるものである。

(3) 受動態に関わるもの

日本語を母語とする英語学習者は、英語学習において次のように受動態を誤って用いることが知られている。

例: John was stolen his wallet by Mary.

(ジョンがメアリーに、財布を盗まれた)

この文は受動態の英語文としては非文法的であり、この文と対応する能動態の文が存在しない。これは、日本語に次のような2種類の受動態が存在することと関係していると考えられる。

例1: 窓がケンに破られた。(直接受動態)

例2: ケンがエリに、ドリアンを食べられた。

(間接受動態-ケンが experiencer すなわち経験者の意味役割を担っている)

上記の間接受動態は英語には存在せず、非文となる。

このことを説明するためには、日本語の間接受動態のストラテジーを英語の間接受動態文の作成に適用してしまったものだと考えられる。英語において日本語の間接受動態にあたるものは、以下のような have-causative (使役) として知られている。

例: John had his wallet stolen by Mary.

(ジョンがメアリーに、財布を盗まれた)

このように、異なる言語により、experiencer (経験者) の意味役割を担う構造が異なっていることがわかる。

この違いを英語学習者が理解し正しく運用することを助けるために、本研究では以下のような明示的な教授法を提案した。

・文法の提示、及び、気づきを高める (Consciousness Raising) タスク。

例: 日本語の受動文をその機能により分類してみる→受動文について明示的に提示→

日英語の受動文・使役文を分類してみる→日本語の間接受動文と英語の have 使役文を比較してみる。

・産出タスク (ライティング・スピーキング)。



図3 産出 (スピーキング) タスク例

上記図3を用いたタスクは、提示されたメタ言語知識を運用につなげるため、絵を見てそれを描写するものである。この図では、I had a glass broken by a cat. という have 使役文が産出できることを目標とする。

(4) まとめ

以上のように、本研究期間中に、幾つかの文法項目を選定し、大学生を対象とした調査を行い、メタ言語知識を涵養する教授法を作成してきた。もちろんまだ英語文法全般をカバーするには至っていないが、従前の学習英文法とは一線を画する英文法指導を提案することができた。また、本研究から、複言語教育のあり方の研究、言語への気づきを高める高連携の研究が新たに着手されており、今後の発展が期待できる。

<引用文献>

- ① Ellis, R. (2009). Task-based language teaching: sorting out the misunderstandings. *International Journal of Applied Linguistics*, 19-3, 221-246.
- ② 大津由紀雄 (編) (2012). 学習英文法を見直したい、研究社.
- ③ White, L. (2003) *Second language acquisition and universal grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① Takayuki Nakanishi, Extensive reading frequency and attitudes in Italy, Japan and the USA, focusing on EFL and ESL contexts: A replication study. 査読有、獨協大学外国語教育研究所紀要、第6号、2018、pp. 79-98.

② Seiki Ayano, Dative possessor raising in double-goal ditransitive constructions in Japanese, 査読有、Proceedings of the

Seoul International Conference on Generative Grammar, Vol. 19, 2017, pp. 71-84.

③ Seiki Ayano, How low is Low Goal in Japanese?, 査読有、Proceedings of the Seoul International Conference on Generative Grammar, Vol. 18, 2016, pp. 34-48.

④ Seiki Ayano, Possessive passive in Japanese: New evidence from honorification, 査読有、Proceedings of the Seoul International Conference on Generative Grammar, Vol. 17, 2015, pp. 53-67.

[学会発表] (計 8 件)

① Noriko Nagai, Consciousness raising tasks: To develop learners' reflective attitude toward plurilingualism, CercleS International Conference (Poland), 2018.

② 岡田圭子、英語教育における高大連携一序列化を超えた価値の創造、日本リメディアル教育学会関西支部大会、2018.

③ Seiki Ayano, Noriko Nagai, Takayuki Nakanishi and Keiko Okada, L2 Knowledge of the that-trace effect for Japanese learners of English, J-SLA (日本第二言語習得学会), 2017.

④ Seiki Ayano, Noriko Nagai, Takayuki Nakanishi and Keiko Okada, When do Japanese learners of English stop generating "indirect" be-passive in English?, GASLA (Generative Approaches to Second Language Acquisition) (United Kingdom), 2017.

⑤ Noriko Nagai, Seiki Ayano, Keiko Okada, Takayuki Nakanishi, Explicit instruction on the other side of the same coin: a case for passive and causative, CercleS International Conference (Italy), 2016.

⑥ Noriko Nagai, Seiki Ayano, Takayuki Nakanishi, Explicit crosslinguistic grammar instruction on passive and have-causative, JACET 55th International Convention, 2016.

⑦ 永井典子、綾野誠紀、中西貴行、岡田圭子、メタ言語知識の涵養による英語の受動・使役文教授法への一提案、語学教育エキスポ、2016.

⑧ Noriko Nagai, Seiki Ayano, Keiko Okada, Takayuki Nakanishi, Explicit instructions

of grammar: Teaching relative clauses in English, JACET 54th International Convention, 2015.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 圭子 (OKADA, Keiko)

獨協大学・経済学部・教授

研究者番号：90316274

(2) 研究分担者

綾野 誠紀 (AYANO, Seiki)

三重大学・教養教育機構・教授

研究者番号：00222703

永井 典子 (NAGAI, Noriko)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：60261723

中西 貴行 (NAKANISHI, Takayuki)

獨協大学・経済学部・准教授

研究者番号：10406019